

「福岡教育大学との連携による研究プロジェクト」＜特別支援教育＞

モデル校 自由ヶ丘小学校の実践 (7/4)

教職大学院 院生実習 最終報告会

(特別支援教育の目的) 学校現場の児童生徒の実態や課題の把握及び最近の傾向分析を基に特別支援教育に関わる研究の在り方、具体的な実践、校内の支援体制作りなど、中長期的な研究プロジェクトとして充実させていく。

教職大学院 院生実習の最終報告の要旨

1 対象児童A君 (気になる子・配慮を要する児童) の場合
観察及びチェックシート・サポートヒントシートなどの活用 から
見えてきたこと及び支援策について

【見えてきたこと】

- ①<強み> 知的な遅れはない・視覚情報が得意・音読が上手・担任や特定の友との関係ができていて視線が合う。
- ②<苦手> 音声のみの指示を理解すること・多様な刺激の中で学習すること・コミュニケーション・気持ちや言葉の真意を推し量ること・場に応じて臨機応変に対応すること

③<授業に参加できる時> 手順や方法がわかった時・活動の役割や自分の出番がある時・友達を受け入れてくれる時・学級全員が学習に集中している時

④<参加できない時> 手順や方法がわからない時・聴くだけ等動的な活動が無い時・友達関係でトラブルがあった時・落書きや手遊び等、学習とは無関係の刺激に興味をそそられた時
【支援の方針】

①<視覚支援による見通しを持たせること> 手順を掲示・板書する・教師や代表児童が活動の仕方のモデルを示す。視覚的な指示をする。

②<肯定的な刺激や関わり方増やすこと> 適切な関わり方(社会的スキル)を具体的に教える。実際に体験させる。友達に教えてもらうような場を設定する。

③<「できた!」を感じさせる仕組みをつくること> めあてを書いたらペアで確かめ一緒に立つ。班学習やペア読みで出番を増やす。スモールステップで学習する。

④飛び出しを予防すること

(飛び出しの原因を予想する)

本人・・・友達と適切に関わる社会的スキルの不足
環境・・・友達の言動

(考えられる解決策)

人・・・遊びの輪に入りたときは「入れて!」という等関わり(スキル)を学ぶ機会を増やす
環境・・・学級全体にあたたかい言葉や受容的な雰囲気が増えるようにする。

教職大学院の院生の実習を通して実習生と指導教官である西山教授により対象児童について詳細な見取りをしていただきました。

実習は5月から7月まで毎週火曜日計15日間にわたって実施されました。1日中対象児童が在籍する学級に張り付いて児童や学級の様子を観察したり補助したりして児童の特性を見取っていきます。並行してチェックシートやサポートヒントシートを活用して児童の特性を分析していきます。その結果を中間報告会や最終報告会で職員に説明をします。報告を受けて学校として全職員で何をすべきかを考えていきたいという強い意向を校長先生が持っておられました。学級担任が何をしたらよいか、学年教師が何が出来るか、養護教諭が何が出来るかを考えて実践していきます。担任だけでなく学校として組織的に取り組むことが特別支援教育ではポイントです。

最終報告会は全職員参加による校内研修の形をとりました。

参加した職員からつぎのような感想や意見が出されました。

- 適切な指導をしていけば、どの子も変わると感じた。
- 教育大学からのアドバイスを生かして指導方法を変えたら、保護者から「最近穏やかになって自分で勉強するようになった。」と喜ばれた。
- A君だけでなく学級全体の指導を変えたらA君がみんなと遊ぶようになった。「A君にはいいところがたくさんあるんだよ。」と学級の子も達が言うようになった。
- 視覚情報が得意ということだったので言葉だけでなく絵カードを作ったり、授業の流れを表す掲示物を掲示したりしたら授業に集中できるようになった。
- 自分の学級の子も達にもあてはまるものがたくさんあったので、自分の学級のことして生かしていくことが大事ではないだろうか。

ポイント1
教師の指示や指導が適切であること

ポイント2 指示は
シンプル(simple)
ビジュアル(visual)
クリアー(clear)

子どもにはどの子にもスイッチが入ることばがある。



教師のことば

- ①「ちゃんとならんでください。」
- ②「ラインに沿って並んでください。」

教師のことば

- ①「姿勢を正しましょう。」
- ②「下の絵のように座ってみましょう。」



ソーシャルスキルトレーニングの大切さ
A君は登校してきた時にグラウンドで学級の子も達がサッカーをしているのを見て「なにしとるん。」と声をかけます。学級の子も達は思わず引いてしまい唖然とします。
※A君は仲間に入れてほしかったのですが、「僕も入れて」とは言えなかったのです。A君にはいろいろな場面でのトレーニングが必要と言えます。
周りの子ども達にはそんなA君を思いやってくることばかけができるように育てていく必要があります。

学級経営が上手な教師の中にはこれらのごことを自然に実践している人が多いです!

配慮を要する子どもへの支援をしていくと、それは学級の他の子どもにも役立つものが多いのです。目からの刺激が入りやすい人と耳からの刺激が入りやすい人、それは誰にも言えることで、その特性のどちらかが強く出てバランスが悪くなっているようです。